

中山人形と横手人形

— 樋渡義一の活動を中心に —

丸谷 仁美*

1 はじめに

土人形・土鈴・張り子・こけしなどの「伝統・郷土・信仰いずれかのイメージを備えた装飾的、玩具的な造形物」を郷土玩具という^(注1)。

郷土玩具という概念が確立されるのは明治中期以降、特に日露戦争での勝利をきっかけに、「日本的なもの」に対する関心が強まっていったことによる。加藤幸治は明治時代以降、知識人らが日本的なものを再確認するために郷土玩具に注目したことを指摘した。その上で大正時代以降、清水晴風の『うなゐの友』をはじめとする、郷土玩具関連の出版物や雑誌上の交流を通して、地方の知識人たちに広く知られていく過程について述べている^(注2)。こうした流れを受け、国内の旅行ブームや地方産業を発展させる目的で、廃絶していた郷土玩具を復興したり、新作したりする動きが、昭和のはじめに広く普及していたことを指摘した^(注3)。

しかしながら加藤は、中央から地方へ郷土玩具運動が派生したと単純に考えるには不明な点が多いとし、中央での動きと同時に、地域ごとに郷土玩具に対する独自の運動が展開されたことを、昭和初期の和歌山県での郷土玩具運動を例に挙げて論じている^(注4)。

こうした加藤の指摘を受け、萩谷良太・山崎祐子は昭和9年(1934)に土浦市で誕生した「かすみ人形」を例に挙げ、人形が生まれた背景やその後の展開について述べている。かすみ人形が誕生した昭和のはじめには、土浦市が観光資源を活かした町づくりに取り組んでいたこと、その中でかすみ人形は、全くの個人の創作であるものの、郷土色を色濃く表現したものであると同時に、日本をイメージできる人形としても意識して創作さ

れたため、県外からも需要を生むことができたことを指摘している^(注5)。

大正期から昭和のはじめに各地で起こった郷土玩具の愛好運動は、秋田県でも同様の展開をみることができる。旧平鹿町で作られていた中山人形が、昭和初期に「横手人形」と名称を変え、横手を代表する郷土の人形として県内外に広く知られるようになった。このことは、当時横手町の助役であった深澤多市をはじめとする、町の有識者らの尽力によるところが大きい。

本稿では、こうした先行研究を受け、中山人形三代目制作者、樋渡義一の活動を中心に、昭和以降の中山人形の発展と展開について整理する。同時に当時の秋田県内の社会状況を視野に入れ、中山人形が秋田を代表する土人形と呼ばれるようになった経緯について考察を試みる。

2. 中山人形について

中山人形は秋田県横手市の樋渡家で制作されている土人形で、令和2年度(2020)に、秋田県伝統的工芸品に指定された。

中山人形の歴史は明治時代まで遡る。慶応4年(1868)、平鹿郡吉田村中山(現横手市平鹿町上吉田中山)に横手町の瀬戸物商が白岩(現仙北市角館町)の陶工を招いて窯を起し、中山瀬戸と称して瓶や煉瓦などを焼いた。ここが中山人形発祥の地となる。

明治5年(1872)、当時湯沢の松岡窯にいた野田宇吉が中山窯を引き継いだ。

野田宇吉(文化10年頃(1813)～明治16年(1883))は肥前国西浦郡唐津の生まれで、後に南部藩に招かれ、「山蔭焼」の創業に参加した人物である。天保の飢饉で山蔭焼が廃窯になると、

*秋田県立博物館

宇吉は東北の窯を転々とし、中山に移り住んだ。宇吉は煉瓦や窯などを作るかたわら、恵比須大黒などの人形を作って売っていたという^(注6)。

本格的に人形の制作を行ったのは、宇吉の息子の嫁である樋渡ヨシ（安政5年頃（1858）～昭和8年（1933））とされる。叔母が横手城代戸村氏の乳母であったため、ヨシ自身も城に上がってさまざまな人形や歌舞伎の絵双紙などを見せてもらったことが後の人形制作につながると言われている。

ヨシは宇吉の息子金太郎との結婚後も樋渡姓を名乗り、舅の手ほどきを受けて人形作りを行った。旧平鹿町では「串あねこ」という首人形が作られており、ヨシはこの人形を発展させて、歌舞伎や当時の風俗を反映した人形を作った。

舅宇吉と夫金太郎が相次いで亡くなった後、ヨシは本格的に人形作りを行うようになった。ヨシの作る人形が、制作地の名をとって、中山人形として認識されるようになったのは、明治25年頃といわれる^(注7)。ヨシは人形を広く販売するために、地元の人々を売り子にして、近郷の祭りや朝市に出かけていった。中山では昭和20年頃（1945）まで「人形もらい」という風習があり、旧3月3日に、売れ残った雛人形を近所の子供達に無料で分け与えていたという。こうした習慣や販売経路の拡大によって、中山人形が横手だけでなく、湯沢や本荘（現由利本荘市）まで伝播していった^(注8)。

しかしながら明治30年代に入り、奥羽線が開通して安い瀬戸物が入ってくるようになると、廃業する窯が多くなった。旧平鹿町近隣では樋渡ヨシの窯のみが残ったという^(注9)。ヨシは後に再婚し、養子を迎え、家族のみで人形制作を続けた。

3. 中山人形から横手人形へ

1) 横手町の発展と物産振興会の発足

明治から大正頃の東北地方の土人形は、他の産地の人形で型を取り、複製品を作ることがあったという^(注10)。江戸時代後期に記された『広益国産考』には、農業経営を安定させるために土人形の製造販売を推奨しているが、そこでも当時普及

していた京都伏見人形から型を取るよう記されており^(注11)、恐らくこうした手法が広く行われていたのであろう。中山人形に限らず、古い人形の中には、型だけでなく色づけなどにも特徴が見られず、どこの産地か判別しがたい人形が多々ある。樋渡家では、本業はあくまでも煉瓦や土管作りなどで、人形作りはヨシの代から本格的にはじめたというから^(注12)、中山人形についても、他の人形と異なる特徴を出そうと考えられなかったのではないだろうか。

中山人形に大きな転機が訪れたのは、昭和に入ってからである。それには当時横手町の助役であった深澤多市と、横手出身の洋画家、金沢秀之助の尽力によるところが大きい。

深澤多市は大正14年（1925）、助役に就任している。当時の横手町は県南地方の農業・商工業の発展による中核都市としての役割があったと同時に、かまくらや送り盆などの行事があり、観光都市としての面もあった。昭和2年（1927）には横手商工会主催の国産振興博覧会が開催され、産業館には各府県から種々の特産品が陳列された。この年の送り盆行事は博覧会と重なったため、10万人を超える観光客が訪れるほどであったという^(注13)。

昭和2年、深澤多市と横手町長斎藤萬蔵らが「物産振興会」を組織し、中山人形を広く紹介しようと試みている。中山人形については金沢秀之助が強い関心を持っており、当時の秋田魁新報でも「中山人形は相当古い歴史あり改良によっては藝術的なものとされ経済的にも他と競争せしむるに充分でこの人形の製作を一層盛にし地方経済と藝術品とし将来に残すべく」尽力したいと語っている^(注14)。

同じ頃、観光地化が進む鹿角市十和田大湯地区で、新たな土産物として「大湯木彫人形」が作られている。これは山本鼎が提唱した「農民美術運動」の一環で、全国に農民美術生産組合が作られた。東北地方では福島県と秋田県の大湯地区がこの運動に参加しており、昭和3年に風俗人形木彫講習会が大湯で開かれている^(注15)。この講習会に勝平得之が参加し、秋田風俗人形を制作するきっかけとなったことは知られているが、金沢秀之助や深澤多市らが農民美術運動とどの程度かか

わりがあったかについては今後の課題としたい。

2) 中山人形の改良

昭和2年、深澤多市は金沢秀之助とともに、人形製造に関する調査を行っている。

深澤多市は6月10日付で、全県町村会長であった山本修太郎に『産業視察報告書』を提出した。そして人形制作について次のように指摘している。

- ・人形制作は農村および都邑の副業として適していること。
- ・中山人形は郷土芸術を保存する上でも、人々の嗜好品としても適していること。
- ・中山人形ならびに秋田市の八橋人形は時勢にあわないため衰退しつつあるが、改良を加えれば、観賞に耐えうるものになること。

以上の観点から、中山人形を中心に置きつつ、東京商工省、仙台堤人形、岩手花巻人形、秋田八橋人形について調査を行った。

5月12日、深澤は金沢秀之助とともに中山人形の制作者である樋渡家を訪れている。この時中山人形は、販売していた地名に因み、「赤坂人形」と呼ばれていた。

報告書には、家の婆さん（ヨシのことか？）が芝居や活動写真で風俗を研究し、人形の原型を作っているが、この家の長男が「今ヤ人形ハ玩具ニアラスシテ観賞品テアルカラ相当技術ヲ煉磨シテ改良シテ見タイモノダ」と語り、長男が「時々原型ヲ拵ヘテ居ル」ことが記されている^(注16)。

この人物が、樋渡ヨシの孫にあたる樋渡義一（瓦山）である。義一は明治39年（1906）生まれで、深澤らが視察に訪れた時はまだ20代であった。義一はヨシに人形作りを教えられ、その頃にはひとり立ちできるほどの技術を身につけていた^(注17)。

同年11月、横手分館図書館で郷土史料展覧会が開かれ、考古資料や古文書など140点あまりが展示された。この展覧会に、樋渡義一の名で「赤坂人形 11個」が出品されている^(注18)。この展覧会には「研究者を魅する物多く」展示され、中山人形が多くの人に触れるきっかけとなるものであった。

深澤多市が中山人形を改良すべきであると考えていること、樋渡義一も人形制作の技術を鍛錬したいという希望があることから、翌昭和3年の1月から4月までの3ヶ月間、深澤は義一を仙台堤人形の製作所に研修生として派遣した^(注19)。仙台堤人形は大正10年（1921）から数回講習会を開いており、既存の技術に加えて新たな製品を生み出していたことから、深澤は研修先としてふさわしいと考えていた^(注20)。さらにこの年、昭和天皇の御大典記念産業博覧会が仙台で開かれることになっていた。博覧会の記念品として仙台の力士谷風の人形が選ばれ、京都、博多の職人が堤人形工房に集まっていたことも、義一が研鑽を積むにはよいきっかけとなった^(注21)。

堤人形への研修事業を金沢秀之助はひどく喜んでいる。この頃金沢は日本大学の講師になり東京に居住していたが^(注22)、深澤多市宛「東京方面の賣れ口とかは私が充分問い合せます。創業の緒についたことはかへすかへすもうれしい事です。一日も早く世に出したいものです」と手紙を送っている。また、「さしあたり御大礼記念として古代風俗有職人形でもこしらへて博覧会なり共進会なりに出品して横手人形のあることを一日も早く知らせたいと思いますのですがどうです。有職風俗の事なら多少は私も心得て居りますし」と提案している^(注23)。

3) 横手郷土史編纂会と大澤鮮進堂

上記金沢秀之助の手紙にも「横手人形」とあるように、この頃から中山人形は「横手人形」と呼ばれるようになった。従来の人形と区別し、横手町の新たな名産品としたいという目的があったためである^(注24)。

有職人形を作るようにという金沢秀之助のアドバイスからか、樋渡義一は昭和3年、新作横手人形として、従来歌舞伎や当時の世相を反映した人形とは異なる、平田篤胤・佐藤信淵の肖像レリーフを200組限定で制作した。

このレリーフを制作するにあたり、義一は次のような文章を残している^(注25)。

「此の度、鮮進堂御主人の熱烈なる御依頼により

まして両大人の肖像を造る気になりましたが、初めての事でもあり元来が天分の至って貧弱な一人形師として吾等秋田縣民が永遠に誇りとし千載に傳へ仰ぐ可き平田佐藤の両大人の肖像などに手を着けることは余りに僭越であり余りに大膽でありました。(中略)幸に皆様が作者の若き日の作を紀年し且稚拙之を通して両大人の神靈に近づき下されましたならば作者は感謝に耐えぬ次第です。昭和三年九月 山の工房にて 瓦山 識す]

※「瓦山」は義一の俳号

「鮮進堂御主人」とは、明治21年(1888)横手町に大澤鮮進堂を創業した大澤堅治のことである。大澤鮮進堂は当初、新聞の取次販売や教科書出版を行っていたが、この頃には学校用品やラジオなど、学校教材を中心に幅広い商品を扱う、横手町を代表する商店であった^(注26)。横手人形も大澤鮮進堂で取り扱われることになった。義一は後年、大澤堅治が横手人形制作において資金面や経営面で親身になってくれたことや、大澤を介して、深澤多市や細谷則理、大山順造ら、横手郷土史編纂会のメンバーらと交流を持つことができた^(注27)と回想している。

横手郷土史編纂会は、大正15年10月、金沢秀之助とその友人である杉村謙吉によって結成された会で、郷土に埋もれている文化財を発掘し、保護するために調査研究を行う目的で作られた。編纂委員には深澤多市や、細谷則理(横手中学校教師)、沼田平治(横手高等女学校長)、大山順造(羽後新報社主筆)などがおり、『横手郷土史』を刊行したり、深澤多市が『秋田叢書』を刊行する際、委員の多くがその編集に関わったりしている^(注28)。

編纂会の委員であった深澤多市や金沢秀之助が、横手人形の発展に尽力したことは先にも述べたとおりである。義一が赤坂人形を出品した、横手郷土史料展覧会の展示品は編纂会委員が収集したものであり^(注29)、義一が新たに作成した平田・佐藤のレリーフの宣伝文を、編纂会会員の細谷則理が担当している^(注30)。

編纂会のメンバーや、鮮進堂主人大澤堅治は、樋渡義一に人形制作に関連するさまざまな人物を

紹介した。深澤多市は『後三年合戦絵詞』の模写を行った画家の戎谷南山(亀吉)を義一とを引き合わせ、戎谷は義一に鎌倉権五郎人形を大小100体ずつ発注した。その際戎谷は義一に、権五郎人形の片目に矢をつけるようアドバイスをしている^(注31)。また、大澤は義一を秋田犬の保存活動に尽力した小野進と引き合わせている^(注32)。

建築家ブルーノ・タウトや勝平得之と、義一が会う機会を作ってくれたのも大澤である^(注33)。昭和11年2月、タウトと勝平はかまくら行事を見るために横手を訪れていたが、タウトはここで横手の土人形に出会い、そのいくつかを購入している^(注34)。

4) 県外への進出

横手郷土史編纂会ならびに大澤鮮進堂の尽力によって、義一の作る横手人形は県内だけでなく、新作人形を発表してすぐ、県外へ売り出されていたようである。金沢秀之助は、昭和3年頃「松屋の楼上で入賞の横手人形を見た」と記している^(注35)、昭和5年には、東京にいた国本善治が、叔父の深澤多市宛に「横手人形は困った事になりました。余り賣れて予約を取った処が樋渡氏から製品なしといふので中に入って困って居ます」と書き送っている^(注36)。このことから横手人形は、新たな道を歩みはじめた頃から東京で評判を呼んでいたことが分かる。

横手人形は当時百貨店で開催されていた地方の物産展にも出品している。昭和15年(1940)までに出品が確認できたものは、東京三越百貨店の秋田県工芸品展覧会(昭和5年)、大阪三越百貨店の東北名産品陳列会(昭和9年)^(注37)、渋谷東横百貨店の郷土芸術名産即売(昭和10年)^(注38)などであり、その頃、東京小石川にあった秋田特産品直売所にも中山人形(カタログでは横手人形ではなく中山人形)を販売している^(注39)。

販売を拡張していくと同時に、横手人形は、秋田高等女学校や秋田女子技芸学校などで行われた展覧会に出品、販売されたり^(注40)、秋田県立図書館内の博物室にも展示されたりした^(注41)。

横手人形は皇族への献上品にもなった。昭和5年賀陽宮同妃殿下が横手を訪れた際、横手町

より秋田叢書、名物漬物、御菓子、横手人形が、横手郷土史編纂会より郷土史料、郷土史読本が献上され^(注42)、昭和6年、澄宮殿下（三笠宮崇仁親王）が横手を訪れた際には、深澤多市の御前講演の後、横手町から、秋田叢書、横手人形、横手郷土史料が献上されている^(注43)。こうした背後には、深澤多市や横手郷土史編纂会らの関与が見てとれる。

4. 中山人形の発展

1) 樋渡義一の目指したもの

新作中山人形として制作された横手人形は、販路を拡大し、名実ともに横手を代表する郷土玩具となっていった。

表1は、昭和5年の横手人形の価格表である。値段は高いもので5円だが、概ね50銭から1円前後で、題材は、雛人形や当時の風俗を象った人形の他に、サンタクロースやマリヤ像といった、西洋の影響を受けたものも見られる。ヨシも女学生などの風俗を象ったものを作ったというが、義一の作品は流行を踏まえつつ、県内の行事や農村部の風俗に即した人形が多い。

表2は昭和9年頃の価格表である。昭和5年よりも全体的に価格を下げて販売されている。冬や雪の風俗を表現した人形が多くなっており、そのほかに秋田にゆかりのある人物像などが作られている。また、欄外には「一般人形の外神佛像、肖像、教育模型等御相談に應じます」と記されている。

昭和3年、仙台の研修から戻った義一は、「これから一人立ちになって、何を何うしてゆくかについて」苦心し、「郷土の風俗。お祭り。子供の遊び。など郷土に根ざしたものを」人形にしようと考えたという^(注44)。そして、竿燈やナマハゲ、カマクラなどの秋田の行事や、雪あそび、エヅメの子供など、精力的に新作人形を制作していった。

人形の型を土から石膏へ変えたのもこの頃である。土よりも石膏の方が耐久性には劣るものの、型からはずれやすく、量産しやすいからという^(注45)。また、従来の中山人形型をみると、高さが20cm前後のものが多いのに対し、横手人形

は10cm前後と小型のものが多い。このことも、義一が量産を目的としていたことと結びつけよう。

横手人形は順調に販売数を伸ばしたように思われるが、苦言を呈する人物も少なからずいた。金沢秀之助は、深澤多市への手紙の中でしばしば横手人形について触れ、「もっと安く、そしてもっと特色がなければあまり他に同様のものがある、それよりはもっと特異な点を研究」してはどうかという提案をしている^(注46)。また、さきの東北名産品陳列会に出品した際には、横手人形のパンフレットに「博多人形と等しいものを作り出した」と書かれていたことに対して、「郷土人形が素朴なローカルを多分に持つところに価値があるのだ。それが郷土色を失って他縣のものゝ真似をしてゆくとは何事か」と批判をする者があった^(注47)。パンフレットの全文が掲載されていないために義一の真意は分からないが、他にはない特徴を出すこと、郷土色を出すこと、などが指摘されている。

秋田県内ではすでに秋田市の八橋人形が県外の人々にも知られており、なおかつ、勝平得之が作り出した秋田風俗人形は、各地の展示会で受賞したり、雑誌の表紙を飾るなどしていた^(注48)。こうした中、新作の横手人形を売り出すためには、並々ならぬ努力が必要であったと思われる。

義一は当初、秋田の郷土に根ざした人形を作ろうと考えていた一方で、販売店であった大澤鮮進堂からは別の注文があった。平田篤胤・佐藤信淵のレリーフのような、秋田にゆかりのある人物像の制作である。鮮進堂からの依頼を受け、義一は石川理紀之助や塙保己一、石井露月などの像を制作している。こうした像は、教材としても求められたため、絵画や写真をもとに忠実に制作することが必要であった。昭和7年（1932）に秋田盲啞学校（現秋田県立視覚支援学校）に寄贈された塙保己一の坐像^(注49)は、塙の役職であった総検校の着物の柄を忠実に再現しているし、秋田犬の人形を制作する際には、義一は小野から写真を借り、助言を受けている^(注50)。小野はさまざまな注文を義一に出したが、義一のことを認めており、大澤堅治へ「瓦山兄の人形、藝術的に良し。（瓦

表 1 昭和 5 年価格表

資料名	価格
家路	60 銭
一ぶく	1 円
嬰詰子	20 銭
おかめ (額付)	2 円
おばこ人形	60 銭
買い初め	40 銭
合掌	90 銭
クリスト (首像)	40 銭
衣狸	50 銭
酒買	20 銭
サンタクロース	20 銭
斜陽	5 円
聖母 (小型)	20 銭
狸公	30 銭
ダルマ (立像)	3 円 50 銭
箱ぞり	60 銭
畑うち	40 銭
春宵	2 円
晩鐘	80 銭
富貴雛	1 円 50 銭
付属 (五人囃子左右大臣官女)	1 円 50 銭
福神 (額付)	2 円 70 銭
福助	1 円 80 銭
布袋 (小)	30 銭
布袋 (大)	1 円 50 銭
マリつき	60 銭
マリヤ	40 銭
マント少女	50 銭
みちふみ	70 銭
雪の子	70 銭
雪むろ	60 銭

※右の外特別御指定の人形床置・肖像・神佛像等
多少に拘らず御相談可申上候

表 2 昭和 9 年価格表

資料名	価格
家路	55 銭
一ぶく	90 銭
嬰詰子	20 銭
おばこ	50 銭
衣狸	45 銭
斜陽	4 円
ダルマ (立像)	3 円
箱ぞり	55 銭
秋田富貴雛	1 円 40 銭
雛付属 (五人囃子、官女、従身)	1 円 50 銭
布袋 (小)	25 銭
布袋 (大)	1 円 30 銭
鞠つき	55 銭
道ふみ	65 銭
雪の子	65 銭
稲刈	40 銭
嬰詰子雛	80 銭
男鹿 生剥 (小)	25 銭
男鹿 生剥 (大)	50 銭
踊おばこ (組)	65 銭
子守り	30 銭
寒日 (小)	25 銭
寒日 (大)	45 銭
農婦	45 銭
晩鐘	70 銭
酷寒 (小)	25 銭
酷寒 (大)	50 銭
みのり	45 銭
雪たたき	25 銭
雪室壁掛	30 銭
観音立像	1 円 50 銭
ダルマ丸額	1 円
平田佐藤両大人丸額 (組)	80 銭
平田佐藤両大人胸像 (組)	4 円 50 銭
石川翁単彩	1 円
石川翁農姿	1 円 50 銭
石川翁丸額	40 銭
石川翁毛布姿	1 円 20 銭

※一般人形の外神佛像、肖像、床置、教育模型等御相
談に應じます

山作)と署名入りで発行」するようすすめている(注51)。

この助言を受けたからか、いくつかの人形の背面に「瓦山」と銘を入れたものが見られる。瓦や陶器作りの合間に作られていた人形は、義一の手によって、細部にまでこだわり、一つの作品である「横手人形」が生まれた。義一の努力を皆が知るからこそ、義一は多くの人の支援を得ることができたのであろう。

2) 困難に立ち向かう

昭和9年(1934)、横手人形の誕生に尽力した深澤多市が急逝した。翌10年、寺町光専寺で追悼会が営まれた際に、義一は深澤多市の胸像を作り、会場に安置した。その像の出来に感服したと、会の後、戒谷南山は大澤宛てに書き送っている(注52)。深澤多市像は胸像の他、衣冠束帯姿の像も制作され、深澤の死後も、義一は新作の人形を深澤家に送り続けた。

横手人形は順調に販売数を増やしており、太平洋戦争前の昭和15年にも「吉田村中山の横手人形は最近注文が非常に多くなり昨年は大小合せて一萬五千個といふ例年に倍数を産出し東京大阪をはじめ各地に送つた」という記事が見られるほどであった(注53)。

しかしながら、時節柄、以前のような人形を作り続けることは困難になっていく。

昭和15年、義一は「建國精神の昂揚に幾分でも役立てたい」と、神武天皇と二武神の三体セットの「建国人形」を販売している(注54)。以前のように人形を販売できなくなっても、建国人形や兵隊人形などを作って乗り切ろうとしたが、時勢の波に抗うことができず、義一は昭和17年頃から終戦まで他の仕事に就き、人形作りを中断せざるを得なかったという(注55)。

終戦後すぐの、昭和20年9月16日、秋田魁新報に「これは素敵な記念品 郷土色満載の”中山人形”復活」という記事が花魁人形の写真とともに掲載された。いずれ来るであろう進駐軍への土産物として、中山人形が最適であるという内容で、「ローカル満点な情緒に富む郷土自慢の風俗人形こそよなき記念品で和やかな交歓の大きな

役割を果たすべく華やかにデビューする日が待遇されてゐる」と記事は結ばれている(注56)。進駐軍の土産物として、早い時期から中山人形が注目されていたことが分かるが、皮肉なことに、樋渡家では戦争に関連した人形を制作していたことを進駐軍にとがめられないよう、古い人形型の大半を廃棄していた。また、戦後の農地改革によって、原料の土を取っていた自身の土地を没収され、中山の土を使うことが出来なくなった。そのため、横手町の大石窯業から土をわけて貰ったり、陶器用の土を購入して制作をせざるをえなくなったという(注57)。

3) 秋田の郷土人形として

上記魁新報の記事にあるように、郷土玩具は戦後、進駐軍などの外国人向けの土産物として注目されるようになった。また国内では郷土玩具そのものの魅力が再認識されるようになり、次第に郷土玩具の人気が高まっていく。高度成長期以降、全国で観光ブームが訪れると、戦前と同様、土産物として郷土玩具の需要が高まり、新たな民芸調の玩具が数多く登場するようになった(注58)。

昭和20年、義一は40歳になっていた。肝心の人形型と、原材料の土を採取する地をうばわれ、横手人形の出発は順調とはいえなかったものの、幸い後継者に恵まれた義一は、妻ハルエ、弟忠之助、長男昭太、三男浩三らとともに再び人形制作を続けることになった(注59)。

当時横手町では家具の製作が盛んで、いくつかの商工展に出品したり、県が工芸品の指導奨励をするなどしていた。このことが人形制作にもはずみをつけることになり、義一は東北北海道工芸協会の会員になって各展示会に出品した。その結果、昭和31年(1956)には東北北海道工芸協会長から中山人形が表彰されることになり(注60)、徐々に人形の注文も増えてきたという。

大量発注を受けた人形を、鉄道で輸送するため、昭和32年には横手駅前に第二工場が作られた。第一工場は今まで通り中山で主に義一が人形制作を行い、第二工場は長男の昭太に任せ、人形制作のほか、当時普及していたマネキンの修理を行った(注61)。

現在使用している人形の包装紙を作ったのも、この頃であると言われている。包装紙には「中山人形」「横手人形」と記され、義一らは、ヨシの作った人形型を「旧作」とし、自ら作った人形型を「新型」と区別した^(注62)。この頃、新聞紙上での呼び方は「中山」「横手」と錯綜しているが、昭和40年代になると、「中山人形」の名称が使われることが多くなっていく。

現在、中山人形の代名詞ともなっている干支の土鈴が一般に普及しはじめたのも、昭和36年頃であった^(注63)。干支土鈴を作るきっかけとなったのは、「愛好家から自分のえとを土鈴にして欲しいという希望が相次いだ」からという。昭和48年、大坂日本工芸館主催の公募展に出品した土鈴丑は最優秀賞を受賞し、昭和54年には未の土鈴が年賀切手の図案に選ばれ、中山人形の干支土鈴が全国に知られるきっかけとなった^(注64)。

土鈴の他にも、義一と長男昭太は、従来の秋田の風俗を映し出した新作人形を作り続けた。

昭和36年(1961)、戦後秋田の転機となる秋田国体が開催された。県内各地でさまざまな観光みやげが制作されたり、一時は途絶えていた郷土玩具が各地で復活したりした^(注65)。義一と昭太は、当時秋田県工業試験場の野口技師の協力で、尾にバネが入って動く「尾振り秋田犬」を制作する。この人形は竿燈人形とともに、全日本推奨みやげ品審査会から「外人向け認定マーク」を受け^(注66)、昭和39年の東京オリンピックで海外向けの土産品を目的として販売された。義一らは、ヨシの作った歌舞伎の題材などの人形も作り続けたが、大きなイベントがあるたびに、時流にあった新しい人形を発表していった。

4) 中山人形が存続し続けた理由

中山人形は昭和のはじめに、樋渡義一が「横手人形」という新作の人形を作り出したことにより、県内外へ知られる郷土人形として発展していった。

横手人形の誕生と同時期に鹿角市大湯で誕生した大湯人形は、新たな観光みやげとして期待されていたものの、10年ほどしか制作販売されず、昭和13年頃には作り手がなくなったという。

大湯人形が急速に衰退していった原因として、藤井安正は、ア)制作に手間がかかるわりに、生活を支えるまでの収入が見込めなかったこと、イ)人形が素朴すぎて、観光客の購買意欲がかき立てられなかったこと、ウ)太平洋戦争前の時期と重なり、人形を制作する風潮ではなかったこと、などを挙げている^(注67)。

中山人形も大湯人形と同じ時期に新作横手人形を販売している。値段も大湯人形とあまり変わらず、木彫と土人形、地元で競合する者がいないという差はあるものの、「雪の子」や「農婦」など、大湯人形と横手人形とでは、題材にそれほど差があったとは思われない。

中山人形が現在まで存続し、秋田を代表する土人形と呼ばれるようになった理由として、以下の理由が考えられる。

a. 横手郷土史編纂会や大澤鮮進堂などによる支援があった。

加藤幸治は、昭和初期に和歌山で郷土玩具運動が盛んになった要因として、①牽引力のあるリーダーの存在、②さまざまな問題意識を持った知識人の出現、③販路や行政に通じた人物の活躍、④サークルの活動と一般市民を結びつける手段(展示会や即売会など)を挙げている^(注68)。

中山人形の場合、深澤多市をはじめとする横手郷土史編纂会ら有識者の後押しがあったこと、人形を販売する上で、大澤鮮進堂という地域を代表する店舗の存在があったことが加藤の指摘にあてはまるだろう。横手郷土史編纂会と大澤鮮進堂とが、横手人形を展示会や百貨店での物産会へ出品させた功績は大きい。

b. 旧作の人形を守りつつ、時代に即した新作人形を発表し続けた^(注69)。

義一は秋田の風俗や行事などを反映した人形とともに、石川理紀之助、平田篤胤・佐藤信淵などの秋田に関連する人物の人形を制作した。また、昭和のはじめには人気漫画の主人公であるのらくろ人形の制作も手がけている^(注70)。戦後には、秋田国体や東京オリンピックの観光みやげとして、竿燈人形や秋田犬をモチーフとした尾振り秋

田犬を制作している。ヨシの時代から作られ続けた歌舞伎を題材とした人形も制作しつつ、時代に即した幅広い題材を常に模索したことは、県内の他の土人形と異なる点であろう。

c. 芸術品としての人形を追求し、質を保ち続けた。

新作横手人形の販売には大澤鮮進堂の関与が大きいことはすでに述べたが、大澤鮮進堂は教科書を中心とした教材の販売を幅広く行っており、横手人形はしばしば学校教材として用いられていたため^(注71)、できる限り正確に人形制作を行うことが求められた。義一自身「一玩弄物たるのみならず実に教育の資料として、學術の参考として」^(注72)人形制作を行いたいと思っていたため、さまざまな人の意見を取り入れて人形制作を行い、できる限り忠実なものを作る努力をした。人形に「瓦山」と署名したことからも、芸術品を作り上げようとした義一の意気込みが感じられる。

こうした義一の思いはその後も受けつがれ、長男の樋渡昭太は「稚拙の美というのにも確かにあるが、職人は磨き抜かれた技術も持っていないとはいけないと思う（中略）作り手の心が作品に吹き込まれていなければ、作品とは言えない」と語っている^(注73)。大量生産だけを目的とせず、人形制作に妥協をしなかったからこそ、中山人形は今日秋田県を代表する人形として存続し続けたと思われる。

5. まとめ

郷土玩具の愛好運動は大正時代にはじまり、地域振興や観光業と結びついて発展していった。各地でさまざまな郷土玩具が取り上げられたものの、時流にのれず、消滅したものも少なくない。

そんな中、中山人形が現在まで継承されたのは、数多くの人々の支援があったことにほかならない。また、そのことに加えて、樋渡義一をはじめとする中山人形の制作者達が、伝統を守りつつ、時勢にあった新作を発表し、かつ品質にこだわったものを作り続けたことが、中山人形を今日まで継承発展させた大きな原動力になっている。

中山人形には、赤坂人形、横手人形などの名称があるが、樋渡義一は後年、「中山から出る土を原料とし、中山に誕生して三代百年にわたる技法をそのままに受けついでいるので、私はやはり中山人形といってもらいたい」と語っている^(注74)。いくどか名称を変え、数々の新作を生み出した中山人形であるが、今日まで継承された大きな原動力は、この義一の言葉の中にあると思われる。

謝辞

本稿の執筆にあたり、樋渡徹氏ならびに横手市教育委員会高橋輝幸氏には、資料の提供ならびに数多くの御教示をいただいた。また、横手市公文書館では大澤鮮進堂関連の資料を閲覧させていただいた。この場を借りて深く御礼申し上げます。

注

- 1) 川越仁恵 1999「郷土玩具」福田アジオ他『日本民俗大辞典』吉川弘文館 495頁
- 2) 加藤幸治 2008「郷土玩具概念再考－物質文化へのまなざしと様々なコンセプト－」『日本民俗学』256号 日本民俗学会 1頁～10頁
- 3) 加藤幸治 2011『郷土玩具の新解釈－無意識の“郷愁”はなぜ生まれたか－』社会評論社 285頁
- 4) 加藤幸治 2008「郷土玩具愛好運動の地域的实践－紀州郷土玩具研究会の活動を中心に－」『民具研究』137号 日本民具学会 1頁～14頁
- 5) 萩谷良太・山崎祐子 2020「郷土工芸品『かすみ人形』－考案者・関勝久氏の事績をもとに－」『土浦市立博物館紀要』第30号 土浦市立博物館
- 6) 副島邦弘 2020「東北陸奥国に渡っていった渡り陶工宇吉の場合」『談林』61号 佐世保史談会 50頁～71頁
- 7) 高橋輝幸 2021「中山人形考」3頁～4頁 私家版
- 8) 秋田魁新報 1993年（平成5）3月21日 朝刊10面
- 9) 秋田魁新報 1983年（昭和58）2月24日 夕刊6面
- 10) 注7 4頁
- 11) 大蔵永常著 土屋喬雄校訂 1946（天保15年）『広益国産考』岩波書店 234頁

- 12) 注 6 65 頁
- 13) 横手市 2008『横手市史資料編 近現代 I』 777 頁
横手市 2011『横手市史通史編 近現代』 354 頁
- 14) 秋田魁新報 1927 年(昭和 2) 7 月 13 日 朝刊 2 面
- 15) 藤井安正 2021『大湯木彫人形 鹿角市歴史民俗資料館調査資料 3』 鹿角市歴史民俗資料館 1 頁～4 頁
- 16) 「産業視察報告書」1927 年(昭和 2) 6 月 10 日(館蔵)
- 17) 秋田魁新報 1962 年(昭和 37) 5 月 19 日 夕刊 3 面
- 18) 横手郷土史編纂会編 1927『横手郷土史料』 第 9 号 56 頁
- 19) 注 7 5 頁
- 20) 注 16
- 21) 羽後公論社編 「職人の(ひろば) 樋渡人形店」 1982『羽後公論』復刻 8 号 28 頁～29 頁
- 22) 秋田県立近代美術館 『金沢秀之助展図録』 64 頁
- 23) 金沢秀之助より深澤多市宛書簡 1928 年(昭和 3) 2 月 13 日(館蔵)
- 24) 樋渡徹氏の聞き取りより
- 25) 樋渡義一より大澤鮮進堂宛書簡 1928 年(昭和 3) 9 月(横手市公文書館蔵)
- 26) 注 13 217 頁～218 頁
- 27) 注 21 28 頁～29 頁
- 28) 注 13 『横手市史通史編 近現代』 375 頁
- 29) 注 18 52 頁～53 頁
- 30) 細谷理則より大澤鮮進堂宛書簡 年代不明 昭和 3 年か? 9 月 25 日(横手市公文書館蔵)
- 31) 樋渡義一より深澤多市宛書簡(1929 年(昭和 4) 7 月 13 日 館蔵)、戎谷南山より深澤多市宛書簡(1929 年 7 月 14 日 館蔵)
- 32) 小野進より大澤鮮進堂宛書簡 1933 年(昭和 8) 年か? 10 月 28 日、樋渡義一より大澤堅治宛書簡 年不明 9 月 16 日(いずれも横手市公文書館蔵)
- 33) 注 21 29 頁
- 34) 篠田英雄訳 1975『日本 タウトの日記 1935～1936 年』 岩波書店 349 頁
- 35) 金沢秀之助より深澤多市宛書簡 1929 年(昭和 4) 2 月 27 日(館蔵)
- 36) 国本善治より深澤多市宛書簡 1930 年(昭和 5) 12 月 25 日
- 37) 秋田県人雑誌社 1934『秋田県人雑誌』 昭和 9 年 5 月号 52 頁、樋渡義一より深澤多市宛書簡 1930 年(昭和 5) 2 月 4 日(館蔵)
- 38) 秋田県人雑誌社 1932『秋田県人雑誌』 昭和 10 年 7 月号 73 頁 なお、樋渡義一より大澤鮮進堂宛書簡(昭和 7 年 9 月 19 日 横手市公文書館蔵) には、横浜で開催する輸出向上土産品試作展に出品が決定したとあるが、確認できなかった。
- 39) 秋田特産品直売店より大澤鮮進堂宛書簡 1938 年(昭和 13) 1 月 28 日(横手市公文書館蔵)
- 40) 秋田県教育会から大澤堅治宛書簡 年月日不明(展示会は昭和 7 年 5 月 1 日から 2 日まで開催)、秋田女子技芸学校より大澤鮮進堂宛書簡 1932 年(昭和 7) 10 月 13 日(いずれも横手市公文書館蔵)
- 41) 秋田県立秋田図書館より大澤鮮進堂宛書簡 1936 年(昭和 11) 3 月 5 日(横手市公文書館蔵)
- 42) 横手郷土史編纂会編 1930「賀陽宮同妃殿下奉迎の記」『横手郷土史資料』 17 号 3 頁 なお、賀陽宮同妃殿下は勝平得之の秋田風俗人形も買い上げている(秋田県立近代美術館 2004『生誕 100 年 知られざる勝平得之』 91 頁)
- 43) 横手郷土史編纂会編 1934「六年拾遺」『横手郷土史資料』 19 号 53 頁
- 44) 注 21 29 頁
- 45) 注 7 6 頁
- 46) 金沢秀之助より深澤多市宛書簡 1930 年(昭和 5) 1 月 16 日(館蔵)
- 47) 注 37 『秋田県人雑誌』 昭和 9 年 5 月号 52 頁
- 48) 勝平得之の秋田風俗人形は第 7 回、第 8 回の東京三越百貨店で開催された童寶美術展に出品し、奨励賞などを得ている(注 42 秋田県立近代美術館 98～99 頁)。
- 49) 秋田魁新報 1932 年(昭和 7) 5 月 2 日 朝刊 1 面。塙保己一(延享 3 年(1746) — 文政 4 年(1821)) は江戸時代の国学者。幼い頃に失明をしたが、学問の道を究め、『群書類従』などの編纂を行った。
- 50) 注 32 樋渡義一より大澤堅治宛書簡 年代不明 9 月 16 日(横手市公文書館蔵)
- 51) 小野進より大澤堅治宛書簡 1933 年(昭和 8) 8

- 月 20 日か？（横手市公文書館蔵）
- 52) 戎谷南山より大澤鮮進堂宛書簡 1935 年（昭和 10）12 月 12 日
- 53) 秋田県人雑誌社 1940『秋田県人雑誌』昭和 15 年 1 月号 58 頁
- 54) 秋田県人雑誌社 1940『秋田県人雑誌』昭和 15 年 6 月号 53 頁
- 55) 秋田魁新報 昭和 37 年 5 月 19 日 夕刊 3 面
- 56) 秋田魁新報 昭和 20 年 9 月 16 日 朝刊 2 面
- 57) 樋渡徹氏の聞き取りによる。現在は信楽焼の土を購入して人形制作を行っている。
- 58) 斎藤良輔編 1999『新装普及版 郷土玩具辞典』東京堂出版 44～45 頁
- 59) 注 7 8 頁
- 60) 注 17 『羽後公論』 29 頁
- 61) 秋田魁 昭和 58 年 2 月 24 日 夕刊 6 面 ならびに樋渡徹氏の聞き取りによる。
- 62) 樋渡徹氏の聞き取りによる。また、樋渡家ではこけしの制作も行っていたという（高橋輝幸氏の御教示による）
- 63) 秋田魁新報には、1949 年（昭和 24）から作られたとする記事と（1980 年 3 月 16 日 朝刊 9 面、1983 年 2 月 24 日 夕刊 6 面）、1961 年（昭和 36 年）からという記事があるが（1975 年 6 月 18 日 夕刊 4 面、1979 年 1 月 7 日 朝刊 6 面、同 11 月 30 日 朝刊 13 面）義一氏の回想で、干支土鈴を作りはじめたのは丑年からで、昭和 40 年代の頃「今から 6～7 年前」と語っていることから、1961 年に普及したとした。
- 64) 秋田魁新報 1975（昭和 50）年 6 月 18 日 夕刊 4 面、1978 年 10 月 4 日 夕刊 5 面
- 65) 拙稿 2017「新聞記事からみた秋田のくらし・行事－昭和 30 年代後半を中心に－」『秋田県立博物館研究報告』42 号 53 頁～54 頁
- 66) 秋田魁新報 1965 年（昭和 40）5 月 29 日 夕刊 2 面
- 67) 注 15 41 頁
- 68) 注 4 8 頁
- 69) 網伸也 2022「東北地方の土人形の系譜と伝承」『民俗文化』27 号 近畿大学民俗学研究所 95 頁
- 70) 樋渡義一より大澤鮮進堂あて書簡 横手市公文書館蔵 日付不明だが、文中「知事夫人より宮様へ拙作人形献上」とあるので、昭和のはじめ頃か？
- 71) 大澤鮮進堂宛の請求書より（横手市公文書館蔵）
- 72) 「横手人形の栞」昭和 9 年 7 月（館蔵）
- 73) 秋田魁新報 1993 年（平成 5）3 月 21 日 朝刊 11 面
- 74) 秋田魁新報 1963 年（昭和 38）1 月 13 日 朝刊 10 面